

Kant の先験的演繹について (2)

林 昌 道

On Kant's Transcendental Deduction (2)

Masamichi Hayashi

第2章 先験的感性論

第1節 空間及び時間の概念の究明の前提

第2節 空間及び時間の概念の形而上学的究明

第3節 空間及び時間の概念の先験的究明

第4節 「帰結」

第5節 「解明」及び「先験的感性論に対する一般的註」

第6節 先験的感性論の検討

1. 先験的観念性と経験的実在性
2. 数学の可能性の基礎づけ

第2章 先験的感性論

第1節 空間及び時間の概念の究明の前提

先験的感性論は「如何にして純粋数学は可能であるか」という問題に答えることを意図している¹⁾。Kantはこの意図を空間及び時間の概念の究明を通じて実現しようとする²⁾。ところで先験的感性論は空間及び時間の概念の究明を以て始まるのではない。物自体と現象について並びに現象の形式と質料について論ずる一節 (§1) 及び外官と内官について論ずる部分 (§2の初めの部分, A22-3=B37-8. B版 darstellt. まで) が空間及び時間の概念の究明の前に置かれている。それでは §1 並びに §2の初めの部分は空間・時間の概念の究明に対し如何なる関係にあるのか。物自体と現象についての言及から考察することにする。

物自体の触発により感覚が生ずるとされている。「我々が対象により触発される限り対象が表象能力に及ぼす結果は感覚である」(A19-20=B34)。ここに注意すべきは物自体に関する論議が素朴実在論の立場に立って展開されていることである。そしてその立場に立って心理学的な理論が提出されている。Kantの批判的立場は素朴実在論の立場と異なるものであることを念頭においてKantの考察をみなければなるまい。さて物自体の触発を受けるのは表象能力(=心性)である。

しかし物自体の心性触発の結果感覚が生じ感覚が結合されて直観となるという意味に理解されてはならない³⁾。むしろ次のように解すべきである。物自体の触発の結果直観が生じると。というのは空間・時間が我々の触発される仕方の形式的制約であるのだから。感覚は直観を分析してゆくと見出されるものにすぎない。物自体が心性を触発するなら、次のことが認められなければならない。即ち物自体と我々の心性が同一の物理的空間（知覚空間とは異なるものとしての）のうちにあること（これは Russell の指摘するところである⁴⁾）、直観が物自体と我々の心性の共同の産物であること⁵⁾、物自体が直観の原因であることの三つである。この三点のうち第一の点についての Kant の意識は不十分であった。第二の点については Kant は之を認めている。第三の点については、Kant は之を認めなければならないのであるが、認めることを拒否していると思われる。けだし物自体が直観の原因であることを認めれば物自体に因果性の範疇を適用することになるからである。素朴實在論が Kant の批判的立場と相容れぬことは物自体による触発から帰結する第三の点が Kant の批判的立場と相容れぬことから明らかである。

上述の如く、物自体の仮定は問題があるのである。批判的立場に立つとき物自体は消去されるべきものである。しかるに Kant は物自体の仮定を固執した。Hartmann は Kant がそのような不整合を犯し得た理由を求め、それを Kant が体系の整合性ではなく、問題の整合性に従ったことのうちに見出している⁶⁾。それでは如何なる問題が体系に破綻を生じさせることができたか。それは認識可能性の限界の問題であった。経験の対象と可能的経験の制約とが対応し、先験的对象と制約の全体性とが対応するが、制約の全体性は可能的経験の制約により汲み尽されない。最高原則は、可能的経験の制約についてのみそれが同時に対象の制約であることを告げる。先験的对象には空間・時間・範疇のほかに制約の残余がある。かかる残余に対応するのが対象の認識不可能な残余である。Kant において認識不可能なものは自体存在である。こうして物自体の仮定は固執されたのである。Hartmann のかくの如き見解は注目すべきものではあるが、難点を含むのではなからうか⁷⁾。

次に Kant の現象概念を考察することにする。我々は Kant の現象概念の二義性に気づくのである。現象は「経験的直観の規定されていない対象」であるとされている（A20=B34）。ここで経験的直観というのは「感覚によって対象と関係する直観」であり（A20=B34）、経験的直観の成立には悟性（実在的使用における悟性、A299=B355）は関与しないのである⁸⁾。経験的直観は或る関係における感覚の排列である⁹⁾。現象はかかる経験的直観の対象なのである。しからば悟性の関与する領域はどこに見出され得るであろうか。このような問題について Kant は考えざるを得なかった。悟性の関与する領域は物自体の世界なのだろうか。それとも物自体の世界とは異なる世界なのだろうか。§1にはこの点についての詳しい説明はない。しかし物体（Körper）の表象から悟性の思惟したもの（例 Substanz, Kraft, Teilbarkeit 等）を取り去ると経験的直観が残る、という Kant のことば（A20-1=B35）のうちには、悟性を現象の世界に関与させようとする意図が窺われる。斯くして現象概念の二義性が認められるだろう。即ち悟性の関与なしに成立する現象の世界と悟性の関与により成立する現象の世界である。後者を科学の世界とよぶことが許されたとした

ら、Kant は §1 において物自体の世界、科学の世界、主観的な現象の世界の三者の区別を暗示していると思われる¹⁰⁾。

§1 には現象の形式と質料についての言及がある。Kant によれば、現象の形式は先天的に心性に具わっている¹¹⁾。この命題は証明されずに主張されている。しかるに Kant はこの命題が証明されているかのように述べている。それは、Kant がこの命題を基礎づける前提を有していたからに他ならない。Kant は如何なる前提を有していたか。それは形式即先天的であり先天的なもの即形式であるという前提——形式主義の前提——と先天的なものは心性の中にあるという前提——主観主義的先天主義の前提——である。現象の形式は先天的であるが、Kant は、先天的なものは心性に具わっているから、現象の形式は心性に具わっている、と考えたのである¹²⁾。現象の質料は感官により後天的に与えられるのである。現象概念の二義性に応じて現象の形式の概念の二義性が予想される。しかし現象の形式として空間・時間が挙げられるとき、空間・時間の概念について二義性が認められているであろうか。現象の形式としての空間・時間は、現象が主観的現象を意味する場合には、表象空間・表象時間であってもよいだろう。しかし Kant は主観的現象の形式として数学の要請するような空間・時間を考えているのである¹³⁾。したがって科学の世界としての現象の世界の形式と主観的現象の世界の形式とは一致するわけである。

Kant の現象の形式と質料についての考察から次のことが帰結する。即ち現象の形式が主観の中にあるのではなく客観的なものとして現象の基礎にあるという可能性（この可能性は Hartmann により指摘されていると考えられる¹⁴⁾）が見落されることである。之は主観主義的先天主義の前提と現象の形式についての考察とからの帰結である。Kant は主観主義的先天主義の前提を採っていたから、先天的なものが客観的なものとして現象の基礎にあることを否定しなければならなかったが、主観主義的先天主義の前提を棄てて、先天的なものが主観の中になく客観的なものとして存することを認めてもよかったのではなかろうか。この点に関しては Hartmann の考察は極めて示唆に富む。幾何学的関係は事物から、描かれた図形から抽象され得るものではない。精々それらにおいて証明され得るにすぎない。しかし幾何学的関係は意識の機能と無関係である。ここに幾何学的関係は純粋に客観的なものであり客観として直観可能であるという第三の可能性が存する。しかし Kant は Hartmann のいう第三の可能性を無視している。

§2 の最初の部分において Kant は外官と内官について論じている。外官により我々は対象を我々の外にあるものとして空間のうちに表象するのである。内官により我々は我々の内的状態を表象する。「内的規定に属するすべては時間の関係において表象される」（A23=B37）。ところでこの空間・時間は表象空間・表象時間であってもよいと考えられる。ところが Kant はこの空間・時間が数学の要請する空間・時間であると考えている。

§1 並びに §2 の初めの部分は空間・時間の概念の究明の前提をなしている。このことは §2 以下を考察することにより更に明らかになるであろう。

第 2 節 空間及び時間の概念の形而上学的究明

先験的感性論は空間及び時間の概念の形而上学的究明並びに先験的究明を含む。前者は現象の形式としての空間と時間が先天的であり主観に属すること、並びに空間・時間が純粹直観であることを証明し、後者は空間と時間が純粹直観であることによってのみ数学の先天的認識が可能であることを証明する。二つの究明のうち前者が際立っていて、後者は見落されそうである。先験的究明のために特別に項目を挙げてページがさかれたのは第二版に至ってである（§3〈B40—1〉及び§5〈B48—9〉）。

空間概念の形而上学的究明は第二版では次の四点から成る。

- i) 空間は経験から引き出された経験的概念ではない。というのは私が感覚内容を私の外の或るものと関連させるためには、また諸感覚内容を並存的として表象し得るためには、既に空間の表象が根底になければならないからである。
- ii) 空間は外的直観の根底に存する先天的必然的表象である。空間が無いとは考え得ぬが、何らの対象も見出されぬ空間が存することは考え得るからである。
- iii) 空間は一般概念ではなくして純粹直観である。もし空間が抽象によって形成された一般概念であるなら、多くの部分空間から合成されることになる。ところが多くの空間がその単なる制限として考えられるところの唯一の空間があるのである。したがって空間は一般概念ではない。斯くして空間は純粹直観である。
- iv) 概念は無限に多くの表象を自らの下に含むものであるが、それらを自らの中に含むものではない。しかしながら空間は無限に多くの表象を自らの中に含むものである。というのは空間のあらゆる部分は無限に同時に存在するから。したがって空間は概念ではなくて直観である。

時間概念の形而上学的究明は空間概念のそれにほぼ平行している。それは五点から成る。

- i) 時間は経験から引き出された経験的概念ではない。というのは時間の表象が先天的に根底になら、同時存在或いは継起も知覚されないであろうから。
- ii) 時間はあらゆる直観の根底に存する必然的表象である。現象一般に関して時間そのものを廃棄することはできないが、時間から現象を取り去ることは可能だからである。
- iii) 時間概念の先天的必然性に時間関係についての必証の原則或いは時間一般についての公理の可能性は基づく。
- iv) 時間は一般概念ではなくて感性的直観の純粹形式である。様々の時間は同一の時間の部分である。唯一の対象によってのみ与えられ得る表象は直観にすぎない。
- v) 時間のあらゆる一定の量は唯一の時間の制限によってのみ可能である。斯くして時間の根源的表象は制限されていないものとして与えられるのでなければならない。したがって時間は直観である。

空間概念の形而上学的究明と時間概念のそれとを比べると、次のような対応が見出される。空間概念の形而上学的究明の i), ii) はそれぞれ時間概念のその i), ii) に対応している。空間概念の形而上学的究明の iii) は時間概念のその iv), v) に対応している。なお時間概念の形而上学的究明の iii) は内容的には先験的究明に属すべきものである。

空間概念の形而上学的究明の i) において、人がその感覚をその人の外にある或る物に関連させるためには、また諸感覚を並存的なものとして表象し得るためには、空間の表象が根底になければならない、とされている。この考えは就職論文に述べられている¹⁵⁾ が、Kant はそれを再びとり入れたのであろう。確かに外的知覚そのものの可能性は空間の概念を予想するだろう。Kant はその空間が幾何学的空間であると考えている。この幾何学的空間は現象が置かれている関係或いは関係の体系であることは Paton の指摘するとおりである¹⁶⁾。この幾何学的空間が基礎になければならぬと説くことによって、幾何学的空間が主観の形式であることは証明されているであろうか。これは検討を要する問題である。幾何学的空間は主観の機能とは無関係に客観的なものとして存在するかもしれない。しかし Kant は次のように考える。空間は「主観的、観念的なものであり、そして精神の本性から確固たる法則によって生じ、一切の全く外的に感覚されたものを相互に同位秩序におくところの、いわば図式である¹⁷⁾。」空間は「客観的なもの、実在的なものではなくまた実体でも偶有性でも関係でもない¹⁸⁾。」こうして空間が主観の形式であることが示される。この場合 Kant には、形式主義の前提と主観主義的先天主義の前提があった。その前提に基づいて空間が主観に具わっていることが証明されている¹⁹⁾。ところでこれらの前提が問題を含むとしたら、空間が主観の形式であるという Kant の主張も問題を含むと言わなくてはならない。

時間概念の形而上学的究明の i) は空間概念のそれに平行している。ここでは Kant は Paton のいう如く²⁰⁾、我々が我々自身の心的発展を時間におけるものとしてのみ直接に知覚するのだということ指摘するのである。物的世界における変化を直接に知覚するというのではない。心的事象が同時に存在するか相繼起するかを表象し得るためには、時間の表象が基礎になければならぬというのである。その時間は数学が要請するようなものとされている。さてこの時間が基礎になければならぬと説くことのみによって時間が主観の形式であることは証明されているであろうか。之は検討を要する問題である。だが空間の場合と同様に Kant は考える。Kant は時間が客観的なものであるかもしれないという可能性を無視し、自己の前提に依拠して、時間が主観の形式であると断定するのである。だがこの断定が問題を含むのは空間の場合と同様である。

空間及び時間の概念の形而上学的究明の ii) において空間・時間は先天的必然的表象であるとされている。ここでは Kant は、Smith の指摘する如く²¹⁾、空間・時間の心理学的先天性を証明しているにすぎない。Kant の意図していた先天性——論理的先天性——の証明には失敗している。

空間概念の形而上学的究明の iii) と時間概念のその iv), v) は、空間・時間が一般概念ではなく、直観であることを証明している。Kant はこれを空間・時間の唯一性、無限性から証明している。空間・時間は唯一のものとして表象される。多くの空間・時間といっても、それは唯一の空間

・時間の諸部分にすぎない。空間・時間の無限性というのは、Paton のいう如く²²⁾、空間・時間の或る量が一つの包括的な空間・時間の制限としてのみ可能だということを意味する。部分としての空間・時間は全体としての空間・時間に先行することはできない。というのは部分としての空間・時間は唯一の空間・時間の制限にすぎないから。この議論には空間・時間が単純なものから合成されたものでないという考えがあろう。空間・時間の部分はまた空間・時間であり、単純なものという点・瞬間が考えられるのみである。Kant は「唯一の対象によって与えられ得る表象は直観である」という (A32=B47)。唯一の空間・時間は直観の対象であるとされる。Kant は空間・時間が直観の対象であることを、空間・時間は直観である、と表現する。そしてその直観は、Paton の指摘する如く²³⁾、その部分が経験から独立に知られるところの全体の直観であるが故に、先天的であるとみなされる。空間・時間は直観であるから一般概念ではないと考えられている。

空間概念の形而上学的究明の iv) は、空間が直観であることを証明しようとする。Kant は空間がその部分を自らの中に含むから空間は無限に多くの表象を自らの中に含むと考えている。概念は無限に多くの表象を自らの中に含むことはできない。したがって空間は概念ではない。空間は概念ではないから直観であるとされる。空間は確かにその部分を自らの中に含む。だからといって空間が無限に多くの表象を自らの中に含むといえるであろうか。もし Kant が空間は無限に多くの表象を自らの中に含むというのであれば、Kant は空間の部分とその部分の表象を同一視していることになる²⁴⁾。なお、時間概念の形而上学的究明においては、空間概念のその iv) に相当する論証はなされていないことを付言しておく。

Kant は形而上学的究明の i) において空間・時間が先天的であり主観的に具わっている形式であることを証明している。この場合先天的であることは現象の可能性の必然的制約であることを意味する。この i) の基礎には形式主義の前提と主観主義的先天主義の前提がある。空間概念の形而上学的究明の iii) と時間概念のその iv), v) とは空間・時間が純粹直観であることを証明している。ここでは i) における先天的な現象の形式が直観の内容であり、その直観が更に全体の直観という意味において先天的とされている。とすると先天的なものの直観が先天的に行なわれるという考えが根本にあるわけである。我々は形而上学的究明を考察することにより、形式主義の前提と主観主義的先天主義の前提が大きな役割を果たしていることを認識することができた。また現象の形式としての空間・時間が主観の形式であると同時に純粹直観であることが明らかになった。現象の形式が純粹直観であることは § 1 において既に触れられている (A20=B34—5) が、それは形而上学的究明の前提と解されるべきではなく、形而上学的究明の帰結と解されるべきであろう (A26=B42, A34=B51)。

第3節 空間及び時間の概念の先験的究明

先験的究明は「或る概念をそれに基づいて他の先天的総合的認識の可能性が理解され得る原理と

して説明すること」(B 40)である。空間概念の先験的究明は次の如くである。

幾何学の命題が先天的総合的命題であることは、我々が与えられた概念から外に出てゆくことを意味する。概念から外に出てゆくことは、空間が直観であることにより可能である。空間が経験的直観でなく純粹直観であることによってのみ幾何学の命題は必証性を有し得る。

時間概念の先験的究明は次の如くである。

時間の関係についての原則或いは時間一般についての公理の可能性は時間が先天的必然的表象であることに基づく。更に変化や運動(場所の変化としての)の概念は時間表象によってのみ可能である。この表象が先天的直観でないなら、変化即ち同一の客体における相矛盾する述語の結合は理解され得ないだろう。我々の時間概念のみが一般力学の如き先天的総合的認識の可能性を明らかにする。

Kant は先験的究明において 先天的総合的判断を成立せしめる第三者を問い、それを先天的直観のうちに求めている。それでは先天的総合的判断の可能性の基礎付けはどうなったのであろうか。先天的総合的判断を成立せしめる第三者と先天的総合的判断の可能性の根拠とは概念としては異なるものである。というのは先天的総合的判断を成立せしめる第三者は純粹直観であるが、先天的総合的判断の可能性の根拠は空間・時間の客観的妥当性であるからである。しかし Kant において純粹直観は同時に現象の形式であり、現象の形式は客観的妥当性を有するものであった。斯くして Kant は先天的総合的判断を成立せしめる第三者と先天的総合的判断の可能性の根拠を同一視したのである。したがって先天的総合的判断を成立せしめる第三者を問うことは先天的総合的判断の可能性の基礎づけを試みることであった。斯くして先験的究明は先天的総合的判断の可能性の基礎づけを意図していたといえよう。

さて Kant は先験的究明において幾何学と時間一般の公理及び一般力学との可能性を前提としてそれぞれ空間・時間が純粹直観であることを証明している。即ち空間・時間が純粹直観であることはそれぞれ幾何学と時間一般の公理及び一般力学の可能性の十分条件であることを示している。ところで幾何学と時間一般の公理及び一般力学との可能性はそれぞれ空間・時間が純粹直観なることからのみ基礎づけられている。即ち空間・時間が純粹直観なるは必要十分条件であることが示されている²⁵⁾。ここには循環はない。この点について次のような解釈がある²⁶⁾。Kant は形而上学的究明において空間・時間が現象の形式にして純粹直観なるを証明しているから、先験的究明において空間・時間が純粹直観なることによってのみそれぞれ幾何学と時間一般の公理及び一般力学との可能性が基礎づけられることを示せばよいのである。Kant はこの必要なことのみをしている、というのである。かかる解釈は正しいと思われる。

先験的究明の論証の進め方について検討しておこう。先験的究明は幾何学と時間一般の公理及び一般力学との可能性を前提してそれぞれの必要条件として空間・時間が純粹直観なることを挙げている。この場合論理的には Kant は幾何学と時間一般の公理及び一般力学との可能性の必要条件として空間・時間の客観的妥当性を挙げ得るのみであろう。しかし Kant は空間・時間の客観的妥当

性は空間・時間が現象の形式であるということにより証明されていると考え、更に現象の形式としての空間・時間は純粹直観であると考えた。即ち現象の形式が同時に純粹直観であるという前提を媒介として Kant は先驗的究明において空間・時間の純粹直観なるを必要条件として示したのである。ところで幾何学と時間一般の公理及び一般力学とが可能であるための必要条件として空間・時間の絶対性を挙げてもよかったのではなかろうか。けだし現象の形式が絶対空間・絶対時間であるということも想定できるからである。「Newton は絶対空間・絶対時間を彼の計算の数学的物理学の基礎とみなした²⁷⁾」のである。しかし Kant は現象の形式が同時に純粹直観であるという前提に基づいて空間・時間が純粹直観なるを必要条件として確立した。Kant は形而上学的究明に依拠して絶対空間・絶対時間の観念を排除している。とすると先驗的究明はその論証の過程においてひそかに形而上学的究明の論証の結果を採り入れている。そして空間・時間の純粹直観なるを必要条件として確立している。

第4節 「帰 結」

「上の諸概念からの帰結」において空間に関して次の如く述べられている。

- a) 如何なる規定も、その規定が帰属する物の存在に先立って、したがって先天的には直観され得ないであろう。しかるに空間は先天的に直観される。したがって空間は物自体の規定を示すものではない。
 - b) 空間は外官のあらゆる現象の形式、即ち「その下においてのみ我々に外的直観が可能であるところの感性の主観的制約」である。また空間は「それにおいてあらゆる対象が規定されなければならない純粹直観として対象の関係の原理をあらゆる経験に先立って含み得る。」
- b)において空間は現象の形式であることから一步進めて、感性の主観的制約であるとされている。Kant は次のように考えたと思われる。空間は現象の形式として先天的なものである。先天的なものは主観に具わっている。したがって現象の形式としての空間は感性の主観的制約である。

空間が主観の形式であることは、既に空間概念の形而上学的究明 i) において示されているのだが、Kant は「帰結」においてこれを確認しているのである。Kant はかかる考え方に基づいて空間の経験的實在性と先驗的観念性を説くのである。

「これらの諸概念からの帰結」において、時間に関して次の如く述べられている。

- a) 時間はそれ自体で存立しているものでもないし、物に客観的規定として付属しているものでもない。というのはそれ自体で存立しているなら、時間は現実的对象を含め現実的なものとなるであろうから。また時間が物の客観的規定であるなら、それは対象に先行することはできないし、先天的に直観され得ないだろう。時間が先天的に直観されるのは、時間が、そのもとにおいてのみ直観が我々の中に生じ得るところの主観的制約である場合である。したがって時間は物の客観的規定ではない。

b) 「時間は内官の形式、即ち我々自身及び我々の内的状態の直観の形式に他ならない。というのは時間は外的現象の規定ではあり得ないから。」ところで時間は無限に進行する一本の直線で以て、つまり空間的に表象される。空間と時間の違いは、前者の部分が同時的であるのに対し、後者の部分が継時的であることに存する。斯くして時間のあらゆる関係は外的直観において表わされる。時間の表象が直観であることはこのことから明らかである。

c) 時間は現象一般の先天的形式的制約である。「あらゆる表象は……心性の規定として内的状態に属し、この内的状態は内的直観の形式的制約即ち時間に属するから、時間はあらゆる現象一般の先天的制約であり、しかも内的現象（我々の心）の直接的制約であり、まさにそれを通じて間接的にまた外的現象の制約である。」

まず a) において時間は現象の形式として先天的に直観されるものであり、更にそのもとにおいてのみ直観の生じ得る主観的制約である、と考えられている。時間についても空間の場合と平行して考えられている。即ち時間は現象の形式として先天的なものであり、先天的なものは主観に具わっているから、時間は主観の形式である、というのである。時間が主観の形式であることは、既に時間概念の形而上学的究明 i) において示されているが、Kant は「帰結」において之を確認している。

c) において時間は「あらゆる現象一般の先天的形式的制約」であると述べられている。時間が現象一般の先天的制約であるというのは如何に解されるべきであろうか。時間が内的現象の直接的制約であり、外的現象の間接的制約であるということを上のように言い表わしたと考えられる。それでは時間が外的現象の間接的制約であるというのは、どういうことであろうか。

我々は現象概念の二義性に思いを致すべきである。現象が単なる主観的現象を意味する場合、外的現象の形式としての空間は表象空間でよいのであり、内的現象の形式としての時間は表象時間でよいのである。ところが Kant は表象空間・表象時間というものに気づかず、空間・時間を数学的空間・数学的時間とみなした。現象の形式としての空間・時間が数学的空間・数学的時間と考えられると、空間・時間は科学の対象としての現象の形式たり得ることになる。科学の対象は必ず時間的規定を有すると考えられるので、時間は科学の対象としての現象の制約であると考えられることになる。c) において心理学的時間が意味されているのではないとする Delekat の指摘は正しい²⁸⁾。時間は内的状態の制約であるが、また数学的時間としては科学の対象（外的対象を含む）の制約でもあるので、時間は現象一般の先天的制約であるとみなされたのである²⁹⁾。Kant はこのような立場に立ち時間の経験的实在性並びに先験的観念性を説くのである。

第 5 節 「解明」及び「先験的感性論に対する一般的註」

「解明」（A 36=B 53—A 41=B 58）及び「先験的感性論に対する一般的註」（A 41=B 59—A 49=B 66, B 66—72）において Kant は次のことを示している。即ち第一に、空間・時間の経験的

實在性は肯定されなければならぬが、空間・時間の絶対的實在性は否定されなければならぬこと、第二に、触発は外官についてと同様に内官についても認められねばならぬこと、この二点である。「解明」及び「先験的感性論に対する一般的註」の叙述は上の二点を中心としているといえる。

Kant は空間・時間の絶対的實在性と経験的實在性との二つの可能性しか認めなかった。そして空間・時間の絶対的實在性が否定されねばならないからその経験的實在性が肯定されねばならないというのである。それでは空間・時間の絶対的實在性は否定されなければならぬことを Kant はどのように示しているであろうか。Kant は之を次のようにして示している。Kant によれば、空間・時間の絶対的實在性を認める人は、空間・時間を実体的なものとして想定するか、属性的なものとして想定するかのいずれかである。前者に属するのは数学的自然科学者——この代表として Newton が考えられている——であり、後者に属するのは若干の形而上学的自然哲学者——この代表として Leibniz が考えられている——である。数学的自然科学者は「(現実的なものは存在しないのに)ただあらゆる現実的なものを自らの中に包括するためにのみ存在するところの、二つの永遠にして無限なる、それ自身で存立する不可解な物(空間・時間)を想定しなければならない」ことになる(A39=B56)。また数学的自然科学者の考えは次の点でも困難を含む。即ち彼らの考えは数学的認識に対し現象の領域を開放するのだが、「悟性がこの領域を超えようとするとは彼らはまさにこの制約のために困惑に陥る」という点である。この点は自然神学に言及した箇所(B版§8, IV)において詳しく扱われている。「我々にとって直観の対象であり得ないだけでなくそれ自身全く感性的直観の対象であり得ない対象を思惟する自然神学において、人はかかる対象のあらゆる直観から(というのはかかる対象のあらゆる認識は、常に制限を示すところの思惟であってはならず直観でなければならぬから)時間と空間の制約を除去しようと細心の注意を払っている。しかしもし人が空間・時間を前以て物自体の形式としてしまっていたら、しかも物そのものが除去されても物の存在の先天的制約として残留するところの形式にしてしまっていたら、人は如何なる権利を以てその直観から時間と空間の制約を除去できるであろうか。というのは空間・時間はあらゆる存在一般の制約として神の存在の制約でもなければならぬであろうから」(B71)。即ち数学的自然科学者は現象に対する数学の適用可能性を説明するのには成功するが、悟性が超感性的なものについて判断しようとするとき、絶対的實在性を有するとされた空間・時間は超感性的なものをも包括しなければならぬことになるので悟性は困惑してしまうというのである。超感性的な対象が空間・時間の中に包括され得ないのは当然のことであろう。斯くして数学的自然科学者の空間時間論は難点を含むとされる。

若干の形而上学的自然哲学者の空間時間論は難点を含むであろうか。彼らは空間・時間を「経験から抽象されたが分離のために混乱して表象された現象の関係(並存或いは継時存在)」とみなす(A40=B56-7)。すると彼らは数学に対し「現実の事物(例えば空間における)に関してその妥当性、少なくとも必証的確實性を拒斥しなければならぬ」ことになる。というのは空間・時間の概念は「この考えによれば、構想力の単なる産物であり、その源泉は現実経験のうちに求められ

なければならない」が「必証的確實性は後天的には成立しない」からである。「経験より抽象された関係から構想力は関係の普遍的なものを含むところの何か——自然がその関係と結びつけた制限なしには起り得ないところの——をつくり出すのである」(A40=B57)。形而上学的自然哲学者が対象について現象としてでなく、単に悟性に対する関係においてにおいて判断しようとする場合、空間・時間のかかる表象は妨げにはならないとされている。Kant はこうして数学を悟性の分析的な学とみなす Leibniz の立場にとってその空間時間論が何ら困難を含まないことを示す。しかし形而上学的自然哲学者は Kant によれば「先天的数学的認識の可能性について(その認識に真の客観的に妥当する先天的直観が欠けているから)根拠を挙げ得ないし、また経験命題を先天的数学的認識と必然的に一致させることはできないのである」(A40-1=B57)。即ち形而上学的自然哲学者の空間時間論は、数学——Kant は数学を悟性の学ではなく感性の学であると考えた——の可能性の根拠を挙げ得ず、現象に対する数学の適用可能性を示し得ない点で困難を含むというのである。

斯くの如く Kant は数学的自然科学者や形而上学的自然哲学者の空間時間論を批判している。Kant のかかる批判の内容を更に明らかならしめるために、「解明」及び「先験的感性論に対する一般的註」の検討を続けることにする。A46=B64-A49=B66において Newton の空間時間論に対する Kant の態度が明らかにされている。Kant は次のように述べている。「空間・時間がそれ自体において客観的であり物自体の可能性の制約であるとせよ。すると先ず次のことが示される。即ち両者について、特に空間について数多くの先天的に必証的で総合的な命題が成り立つことである。」そこで Kant は問う。かかる先天的総合的命題を人はどこから得て来るのか、また「そのような絶対に必然的で普遍妥当な真理に到達するために」悟性がよりたのむものは何か、と。Kant によれば、悟性がよりたのむものは概念か直観であるが、それは純粹直観であるとされる。数学の領域においては「人は斯くしてその対象を先天的に直観において与えなければならない、そしてこの対象にその総合的命題を基づかしめねばならない。」Kant は更に考察を進めている。「先天的に直観する能力がなければ」、「この主観的制約が形式に関して同時にその下においてのみかかる(外的)直観の客体が可能であるところの先天的普遍的制約でなければ、対象(三角形)が人の主観との連関なしにそれ自体においてある何ものであるなら、人は如何にして次のように言うことができよう。即ち三角形を構成するのに主観的制約のうちに必然的に存するものが三角形それ自身にも必然的に属さなければならぬ、と。」Kant は斯の如き議論により空間・時間が純粹直観であることを証明している。ところでこの議論は最初に Newton の見解を仮定していた。即ち「空間・時間はそれ自体において客観的であり物自体の可能性の制約である」という仮定に立っていた。が Newton の見解は否定されることなく、空間・時間の純粹直観なることが証明されている。このことは何を意味するであろうか。数学の領域において空間・時間が Newton の説くように絶対的に実在的なものであって、しかもそれが純粹直観でもあるという可能性を Kant が許していたことを意味するだろう³⁰⁾。空間・時間が絶対的実在性を有するが純粹に直観されるものであると考え

た場合、もし数学の領域だけが問題とされるのなら空間・時間が絶対的実在性を有し、しかも純粹直観であると考えことは何ら困難を伴わない、と Kant は考えていたと思われる。しかし Newton の見解が数学以外の領域（例えば自然神学）において困難を含むことを Kant は見出す。斯くして Kant は Newton の説を批判するに至るのである。

A43=B60-A46=B63 において Kant は Leibniz の感性概念を批判している。「Leibniz, Wolff の哲学は我々の認識の性質と源泉とに関するあらゆる探究に全く正しくない観点を指示していた。というのは彼らの哲学は感性と知性との区別を単に論理的なものとして考察したからである。しかし感性と知性の区別は明らかに先験的であり、単に我々の認識の判明性または不判明性の形式に関するものではなく、認識の源泉と内容に関するものである。」斯くして Kant は Leibniz, Wolff と異なる感性概念を提出するにいたる。そして数学を感性の学とみなす。Leibniz にとっては数学は悟性の分析的な学であった。Leibniz にとっては感性的認識は物の混雑せる表象を与えるにすぎなかったが、Kant は之に対し数学を感性の学とみなし、感性の権利の回復を図った。Kant はかかる根本的立場から Leibniz の空間時間論を批判したのである。Leibniz の空間時間論は数学の必証的確實性を証明しえぬ故廃棄されざるを得ない。こうして Kant の空間時間論が残された唯一の途としてうかび上るのである。

Kant は上にみた如く、空間・時間の絶対的実在性の否定されなければならぬ所以を示し、代りに空間・時間の経験的実在性が肯定されなければならぬと主張する。この場合 Kant は空間・時間について絶対的実在性と経験的実在性との二つの可能性の二者択一を要求してあるのである。ところで Kant が二つの可能性の二者択一を要求したのは如何なる根拠からであろうか。これについて考察することにしよう。

Kant は空間・時間を現象の形式とみなす。つまり空間・時間の経験的実在性を肯定する。形式主義の前提及び主観主義的先天主義の前提に基づいて、空間・時間が現象の形式であるが故に主観に具わっていると想定されるとき、空間・時間の先験的観念性が主張されることになる。空間・時間の絶対的実在性と先験的観念性とは確かに両立不可能である。ところで空間・時間の絶対的実在性と先験的観念性との両立不可能なことから、空間・時間の絶対的実在性と経験的実在性との両立不可能なことが推論されている。けれど Kant において空間・時間の先験的観念性と経験的実在性とは結びつくものであったから。それでは空間・時間の先験的観念性と経験的実在性は結びつける役を果たしたのは何か。それは形式主義の前提と主観主義的先天主義の前提であった。したがってこれらの前提が問題を含むとしたら、空間・時間の絶対的実在性と経験的実在性の二者択一の要求も問題を含むと言えよう。空間・時間が絶対的実在性を有し、しかも経験的実在性を有するという可能性は Kant においては扱われていないが、このような可能性も考えられるのである。Kant はこの可能性に対し反駁をしていない。というのは絶対的実在性と経験的実在性との二者択一に問題があるなどとは思ひもよらなかったからである。

次に内官の触発について考察してみよう。第二版の § 8 の II は「外官並びに内官の観念性したが

って感官のあらゆる客体（単なる現象としての）の観念性」を明らかならしめるために付加されたと考えられる。それでは Kant はかかる観念性をどのようにして明らかにしているだろうか。Kant は外官に関して次のように述べている。「外官によって関係表象のみが与えられる」（B67）。関係といっても主観に対する対象の関係である（B67）。が「単なる関係によっては物自体は認識されない」と Kant は考える（B67）。次に Kant は内官に言及する。内官については外官の場合と平行的に Kant は考察をしている。したがって外官により対象自体が直観されないように、内官によっては自己自身はあるがままには直観されない。自己が現われるがままに直観されるのである。これはⅡの最後の部分で Kant が明らかにしているところである。内官は自己が現われるがままに自己を直観する。「自己が現われるがままに」というのは内官が触発される仕方に従って、ということである（B69）。Kant は内官に触発を認めた。Kant は外官及び内官の観念性を上の如き仕方でも明らかにした。

、それでは内官の触発はどのようなものだろうか。自己意識の能力が内官の中にあるもの——内官が自らのうちに定置したもの——を覚知すべきなら、自己意識の能力は内官を触発しなければならない、と Kant は考える。この内的触発により内的直観が成立する。内的直観の形式は時間である。時間は関係（同時存在、継時存在、持続）を含むものとして、関係表象のみが内官により与えられ得るということになる。内官の触発については次のようにも考えられている。即ち内官に多様な表象が与えられるということは内官が多様な表象を時間において自らの中に定置することにより可能となり、内官はこの定置の働きにより触発されるというのである。この定置の仕方の形式的制約が時間なのである。上の如く内官を触発するものとして自己を意識する能力と表象定置の働きとの二つがあるかにみえるが、二つあるわけではない。表象定置の働きは自己意識の能力の働きなのである。ところで内官の触発の考えが難点を含むのは Delekat の指摘する如くである³¹⁾。彼によると、自己直観の対象として表象しかない。そして自己直観において把えられるものは直観されるものの空間時間的連関である。だがその連関を自我が如何にして自己のうちに直観し得るかという疑問が生じる。Kant が内官について触発を認めて困難を回避しようとする、触発の意味を変えることになるというのである。

第6節 先験的感性論の検討

1. 先験的観念性と経験的實在性

Kant は空間・時間について先験的観念性と経験的實在性を主張した。空間・時間の先験的観念性と経験的實在性を結びつけたのは、既述の如く、形式主義のテーゼと主観主義的先天主義のテーゼであった。ところでこれらのテーゼは何ら疑いの余地なきテーゼであらうか。

Hartmann はこれらのテーゼに批判を加えている。形式主義のテーゼについての Hartmann の見解は次の如くである³²⁾。形式的・質料的という対立と先天的・後天的という対立とは相互に無関

係である。先天的なものがすべて形式的であるとは限らない。普遍妥当性と形式性は相おうものではない。先天的なもののうちに、例えば幾何学の体系のうちに、広い妥当領域を有する法則と狭い妥当領域を有する法則とがある。そしてより普遍的な法則はより特殊な法則に対し形式的であり、後者は前者に対し質料的である。したがって形式的・質料的という区別は相対的なものである。斯くして質料的先天性も存在し得るのである。Hartmann は形式と先天性を等置する Kant の形式主義のテーゼを採ることはできないというのである。かかる Hartmann の見解は正しい。

主観主義的先天主義のテーゼについての Hartmann の見解は次の如くである³³⁾。Hartmann は主観主義的先天主義を批判する場合、道徳法則についての主観主義的理解を批判することから始めている。主観主義的先天主義のテーゼに従えば道徳法則は主観に起源を有することになる。道徳法則が主観に起源を有するという仮定は如何にして正当化されるか。Kant にとり二つの可能性しかなかった。道徳法則は外界、事物、自然に由来するか、それとも理性に由来するかなのである。前の場合、道徳法則は経験的であり、後の場合、道徳法則は普遍的、先天的である。Kant によれば道徳法則は経験的ではあり得ないから、それは理性にのみ由来し得る。道徳法則が主観に起源を有するという仮定は、Kant において否定肯定式混合選言的三段論法により正当化されているのである。道徳法則は自然に由来するか理性に由来するかであるが、自然に由来しないから理性に由来すると推理されている。この自然に由来するか理性に由来するかにより Kant があらゆる場合を尽しているなら、一方の可能性が虚偽であることからもう一方の可能性が肯定されるだろう。しかしこの自然に由来するか理性に由来するかにより Kant はあらゆる場合を尽していないから、Kant の推理は誤謬推理である。Kant は第三の可能性を排除している。Kant が範疇の問題において、その経験的起源を認めない場合、主観の機能としてのみ認められるとして、それ以外の可能性を排除したのと同様である。範疇論において先天的に認識されるものを純粹直観と純粹悟性概念に関係させることが偏見であるように、ここにおいて先天的なるものを立法実践理性に還元することは偏見である。二者択一が単に先天的か後天的かというのであればその二者択一は正しく、第三の可能性は排除される。しかし Kant の「自然からか理性からか」というのは「後天的か先天的か」というのと異なる。Kant は主観の機能をその本質としないアプリアリを表象することができないのである。ところで先天的洞察は実在的な個々の対象が与えられなくとも成立している。そこにまさにその先天性があるといえよう。主観はかかる洞察を、与えられた場合からとり出すのではない。主観は対象の表象に先天的洞察を付加するのである。が主観は付加物を自分で産出するには及ばない。主観は先天的なものの内容を後天的なものの内容と同じように対象的に眺めることができるのである。先天的内容が経験的对象のうちに読みとられ得ないといって、先天的内容の対象性が廃棄されるものではない。幾何学的関係は事物から、描かれた図形から抽象され得るものではない。精々それらにおいて証明され得るにすぎない。しかし幾何学的関係は純粹に客観的なものであり、客観として直観可能である。そして意識の機能と無関係である。原因と結果の関係は知覚の両方の項が与えられているにせよ、知覚され得ぬ関係である。しかしそれにも拘らずそれは対象の関係であり、

知覚対象に付加される。それは意識機能の関係ではない。かくの如き Hartmann の批判は正しい。

空間・時間の先験的観念性と経験的實在性との結びつきが Kant と恣意的な前提——形式主義と主観主義的先天主義——によって媒介されているとしたら、かかる結びつきは断ち切られてしかるべきだと思う。空間・時間の先験的観念性と経験的實在性が結びついているとき、空間・時間の絶対的實在性と先験的観念性とが両立不可能なことから我々は空間・時間の絶対的實在性と経験的實在性との二者択一を迫られたのであるが、空間・時間の先験的観念性と経験的實在性の結びつきが断ち切られると空間・時間の絶対的實在性と経験的實在性の二者択一を我々は迫られなくなるだろう。我々は空間・時間が絶対的實在性を有すると同時に経験的實在性を有すると考えることができるのではなからうか。このように考えた場合、空間・時間を神の存在の制約にすることにならぬかという懸念もあろうが、我々は空間・時間の絶対的實在性から神の存在の制約としての空間・時間が帰結するわけではないと考える。

2. 数学の可能性の基礎づけ

数学の現発展段階においては数学の客観的妥当性の証明を試みることは意義のないことかもしれない。實在の幾何学がユークリッド幾何学か非ユークリッド幾何学かという問題は実験によっても決定され得ないことが明らかとなった。とすると實在の幾何学としてユークリッド幾何学と非ユークリッド幾何学のいずれをとるかというのは便利さの問題に帰着することになる。しかしこのような考え方は Kant の考え方ではない。Kant は数学が客観的妥当性をもたねばならぬとする数学観に基づき数学の可能性の基礎づけを必要であると考え³⁴⁾。先験的感性論は数学の可能性の基礎づけを意図している。この先験的感性論の意図に関して先験的究明の節は注目すべきものを含む。

先験的究明がその論証の過程に形而上学的究明の論証の結果をひそかに採り入れていることは先に指摘した如くであるが、先験的究明がこのようなものであるとすれば、先験的究明はそれだけでは数学の可能性の基礎づけに失敗しているということになるだろう。しからば先験的感性論は「如何にして純粋数学は可能であるか」という問題に答えていないのであろうか。Kant は答えているのである。というのは Kant は形而上学的究明に依拠して数学の可能性を証明しているから。

それでは形而上学的究明は空間を如何なるものとして示したであろうか。空間は幾何学的空間として示されたが、その幾何学的空間は、Kant においては、ユークリッド空間であった。現象概念の二義性に基づき Kant は現象の形式としての空間に表象空間と幾何学的空間の二つを認めてもよかったのであるが、Kant はその二者のあることに気づかず、現象の形式としての空間は即ち幾何学的空間であるとみなした。斯くして物体は相互にある空間関係の中に在るものとして表象されるが、その基礎に幾何学的空間が要請されることになる。そしてこの幾何学的空間はユークリッド空間であると考えられている。ところで幾何学的空間をユークリッド空間と同一視するのは、現在からすると誤りであろう。科学は物体を非ユークリッド空間の中に在るものとして考察することもあるわけである。幾何学的空間をユークリッド空間と同一視した点に、我々は Kant の考察の限界を認めるべきであろう。Kant にとっては空間は即ちユークリッド空間であったのである。

このように考えると、空間が現象の形式であるといってもユークリッド幾何学が対象に対し妥当性を有することは証明され得ないというべきだろう。Helmholz は空間に関する Kant の学説の二部分、即ち (i) 空間が直観の純粹形式であることと (ii) 空間の科学、ユークリッド幾何学が先天的に妥当することとは、(ii) が (i) から出てくるほど緊密に結びついていないとみている。Helmholz は (i) を事態の正しい表現として進んで受け入れようとする。しかしながらそのことから外界のすべての物は空間的拡がりをもつということ以上には何事も推論され得ない、というのである³⁵⁾。Kant の空間と幾何学についての考察を批評した Helmholz のことばは正しい。ユークリッド幾何学の客観的妥当性の証明は不可能なのである。

Kant はユークリッド幾何学の客観的妥当性を前提した。そしてユークリッド幾何学の可能性の基礎づけを試みた。もし Kant が非ユークリッド幾何学について考察を進めていたら、幾何学の客観的妥当性の問題に新しい光を投げかけることができたであろう。非ユークリッド幾何学を Kant は知っていた。非ユークリッド幾何学はその無矛盾なるが故に論理的に可能であることを Kant は認めている³⁶⁾。しかし非ユークリッド幾何学は構成され得ないというのである。したがって非ユークリッド幾何学は客観的妥当性を有しないと考えられた³⁷⁾。斯くしてユークリッド幾何学のみが客観的妥当性を有すると Kant は考えたのである。ところで非ユークリッド幾何学は構成され得ないであろうか。成程非ユークリッド幾何学はユークリッド空間においては構成され得ないだろうが、非ユークリッド空間においては構成され得るのではなからうか。Kant が非ユークリッド幾何学をもって構成不可能であると考えたのは、空間をユークリッド空間と同一視していたからであろう。

斯くして Kant は二つの前提を有していた。即ち空間は幾何学的空間であること、並びに幾何学的空間はユークリッド幾何学の公理を満足するユークリッド空間であることである。Kant はかかる前提に基づいて幾何学の可能性の基礎づけを行なっている。しかしこの前提の正当性が問われなければならない。我々はユークリッド幾何学の公理を満足する空間を考えることもできれば、非ユークリッド幾何学の公理を満足する空間を考えることもできるのである。すると空間をユークリッド的であるとする Kant の前提には従い得ないことになる。空間がユークリッド的でもあれば非ユークリッド的でもあるとすると空間は客観的なものとして存していてそれをユークリッド的に捉えたり非ユークリッド的に捉えたりするのだというように考えることもできよう。換言すれば空間が客観的形式として存しているということの認められる可能性が出てくることになる。この客観主義的な理解は Kant にはみられないのである。

次に時間について考察することにしよう。形而上学的究明は時間を如何なるものとして示したであろうか。時間は表象時間としてではなく、いわば数学の要請するような時間として示された。Kant は時間についても、空間の場合と同様に、表象時間と数学の要請する時間とを同一視している。それでは空間を基礎として幾何学が成立するように時間を基礎として成立するものは何であろうか。それは算術であろう³⁸⁾。時間一般の公理は算術の基礎にあるものと考えることができる。一般力学は時間のみを基礎とするものではなく、空間・時間の両方を基礎とするから、この場合一般

力学を考慮の外におくことにする。さて算術は原理は幾何学の公理と同じく先天的総合的判断である。この先天的総合的判断は時間が純粹直観なることによって可能となる³⁹⁾。我々は時間においてのみ数えるという行為をなし得るということになるだろう。ところでその場合人は誰でも今しがた数えた数よりも更に先へと数えることができるだろう。とすると数、したがって時間は無限にのびゆく可能性をもたねばならないだろう。しかしこの考え方によれば超限数というものはいり得ないことになる。というのは限りなく数えるということは不可能だからである。数について Kant は実無限という立場ではなく可能無限という立場を採っていた⁴⁰⁾。Kant は構成され得ない数は存在しないとしたのである。

斯くして Kant は二つの前提を有していた。即ち時間は算術の要請する時間であること、並びにその時間において構成され得る数のみが存在することである。Kant の考える時間において構成され得る数のみ存在するということは如何にして証明され得るだろうか。Kant の方法によっては構成することのできぬ数(超限数)の存在も認められるべきではなかろうか。とすると Kant の時間概念、更にその時間における構成という概念から我々は解放されることになるだろう。時間が直観の形式だったから、我々は数えるという行為をこえた数の存在を認められなかったのであるが、我々が Kant の時間概念から解放され、時間を客観的形式として考えることが許されるとしたら、超限数の存在を認め得るだろう。我々は時間を客観的形式として認めるべきではないかと考えるのである。

数学の適用については現在では次のような見解があることを指摘してこの稿をとじることにする。数学を感官経験に適用するというのは感官経験或いは Kant の言うように、純粹直観としてその根底にある空間時間的構造を記述することではない。数学の適用は数学の理論の命題と、それに対応するが論理的には同値でない経験的命題との同一視において成り立つ。数学的命題と経験的命題について語る命題そのものは経験的である⁴¹⁾。

(註)

- 1) B73, Prolegomena, § 5～.
- 2) A89=B121-2. Prolegomena, § 12.
- 3) H. J. Paton: Kant's Metaphysics of Experience, I, 4th impression, 1965, p. 138.
- 4) Bertrand Russell: The Problems of Philosophy, 1912, reprinted 1967, p. 15.
- 5) Paton: op. cit., p. 142.
- 6) Nicolai Hartmann: Diesseits von Idealismus und Realismus (Kleinere Schriften, II, 1957, S. 278—)
- 7) 私は素朴實在論及びそれを基礎とする物自体の仮定が批判的立場と相容れないと考える。Hartmann は物自体の仮定が Kant の先験的観念論の体系と相容れないと考える。この点に関しては私は Hartmann の見解に賛成であるが、Hartmann は更に Kant が物自体の仮定を固執した理由をたずねるのである。そしてそれを Kant が問題の整合性に従ったということのうちに見出す。

Hartmann は体系的思考法と問題中心的 (aporetisch) 思考法を区別し、Kant においては問題中心的思考法が優勢であったとみる。問題中心的思考法にあっては問題が神聖なのである。このような見方に立って、Hartmann は Kant が認識可能性の限界の問題に呪縛されて結局体系の呪縛を破ったと理解する。

ところで問題が神聖であるとする考え方はどうであろうか。問題というものは或る立場に立って提起されるも

のではなからうか。その意味において問題を神聖視する考え方に疑問を呈し得よう。確かに認識可能性の限界の問題は Kant を呪縛していたといえるが、それは批判期の Kant を呪縛していたのである。その意味においてそのような問題は批判的立場において初めて提起され得たといえよう。しかるに物自体の仮定は既に前批判期に採用されていた。こう考えられるとしたら、前批判期に採られていた物自体の仮定が批判期に採られていた物自体の仮定と同じ意味のものであるとは即断し得ないことになる。したがって物自体の仮定がどの時期のものであっても認識可能性の限界の問題によって固執されたのであるとは解し得ないことになる。前批判期において物自体の仮定を採らせたのは実践的関心かもしれない。Hartmann は物自体の概念を一義的に捉えたために、上のような考え方をしたのであろうが、果して物自体の概念が一義的であったと言えるだろうか。

8) A22=B36には、悟性はその概念により思惟するところのもののすべてを分離し、経験的直観以外には何も残らないようにする操作のことが述べられている。ここでは悟性は経験的直観の成立に関与しないとみなされている。なお感性論の冒頭(A10=B33)においても感性と悟性の二元論的立場が採られており、悟性は経験的直観の成立に関与しないと考えられている。また次のようなことばもある。「何かを思惟するあらゆる働きに表象として先行し得るものは直観である」(B67)。

9) 「現象の多様が或る関係において排列され直観されるようにするものを私は現象の形式と名づける」(A20)(これを第二版では次のように少し変えている。「現象の多様が或る関係において排列され得るようにするものを私は現象の形式と名づける」(B34))。「それにおいて現象のあらゆる多様が或る関係において直観されるところの、感性的直観一般の純粹形式は心性のうちに先天的に見出される」(A20=B34)。

上文から経験的直観は或る関係においての感覚の排列を意味するものと解してよからう。それでは或る「関係」における感覚の排列というときその「関係」は空間的關係のみを指しているのだろうか。Kant が外官と内官を平行させている点を考えると、その「関係」は時間的關係をも含むと解されなければならないだろう。B66—9の説明を参照すると次のように解されよう。空間的關係のうちに排列された感覚が時間的關係(継起、同時存在、持続)のうちに排列される、と。

10) Paton: op. cit., p.96 note 参照。なお Paton は indeterminate object と determinate or phenomenal object の区別が Kant により無視されていると述べている。

Smith は主観的内容としての感覚、空間における実在的持続的対象、物自体の三者の区別が Kant にみられると説く。(Norman Kemp Smith: A Commentary to Kant's 'Critique of Pure Reason', 2.ed., 1923, p. 84)

11) これは Paton (op cit., p.94 note) によれば Kant が証明しようとしたことであるが、私はこれが Kant の前提であったと解する。

12) 現象の形式が先天的であるというのは Kant の主張するところである(A20=B34 Da das, worinnen……bereitliegen)。先天的なものが心性に具わっているということについては Kant の説明はないが、ここに先天性と主観性の結びつきが成立している。Kant は如上の前提の上に立って、主観に具わる形式という意味をもつ Form der Sinnlichkeit という表現をしたのである。

Smith によれば、先天的なものは主観的でなければならぬというのは Kant の考えであるが、Kant が之を自明の事とみていたとする Vaihinger の解釈に対し、Smith は空間・時間の主観性が既に二律背反により確立されたので空間・時間の先天性から主観性を導き出すのを怠ったと解する。

13) Poincaré は外部の対象を幾何学的空間内に表象することは不可能であるとする。表象空間のうちに表象するのであるという(「科学と仮説」河野伊三郎訳、岩波文庫、第12刷 p. 83)。Kant は表象空間というものに気がつかなかった。

空間は外官の形式であるが、空間において対象の形、大いさ並びに相互関係が規定され得るとされている(A22=B37)。すると空間はそこで対象の形等が規定され得るものとして幾何学が要請する空間であると考えられる。「上の概念からの帰結」の b) には次のようなことばがある。「対象から触発される主観の受容性は、かかる客体のあらゆる直観に必然的に先行するのだから、如何にしてあらゆる現象の形式があらゆる現実的知覚に先立って、したがって先天的に心性において与えられ得るか、また如何にしてその形式がそれにおいてあらゆる対象が規定されなければならないところの純粹直観として対象の關係の原理をあらゆる経験に先立って含み得るか

は理解される」(A26=B42)。ここでは受容性の仕方としての現象の形式が「それにおいてあらゆる対象が規定されなければならない純粋直観」であると考えられている。換言すれば現象の形式は数学の要請するような純粋直観であることが述べられている。

Kant は表象空間・表象時間なるものに気がつかなかったのであるが、空間・時間そのものと空間・時間の表象との関係をどう捉えていたのだろうか。私は Kant が両者を区別しなかったと解するが、Paton は空間・時間の表象とその内容としての空間・時間そのものとを区別を Kant のうちに見出している。そして次のように解釈する。空間・時間は現象の形式で、その表象は先天的である。したがって感性の性質に基づく。更にその表象の内容も感性の性質に基づく。かくして空間・時間は感性の形式であることが示される (Paton: op. cit., p. 102)。Kant は空間・時間とその表象の区別を通じて空間・時間が感性の形式であることを証明したというのが Paton の解釈であろうが、私のみるところでは、Kant は空間・時間が現象の形式であり、したがって感性の形式であると自己の前提——形式主義及び主観主義の先天主義の前提——に依拠して主張したのである。空間・時間とその表象についての Paton の見解は採り得ない。

14) Nicolai Hartmann: Ethik, 4. Auflage, 1962, S. 105.

なお Smith (op. cit., p. 113) は空間が先天的であっても物自体の如き實在かもしれないと述べている。

15) 17) 18) Dissertatio, § 15.

16) op. cit., p. 104.

19) 岩崎博士は空間が主観の形式であることはここでは証明されていないとみなす (岩崎武雄著「カント『純粋理性批判』の研究」1965, p. 64-5.)。Paton もそのような見解をとる (op. cit., p. 102 note)。Smith は、Kant がこの議論により空間表象の非経験的なるだけでなく主観の起源を有するものなるを、また経験に時間的に先行するものなるを証明したと思いこんでいる、と解する (op. cit., p. 101)。

20) op. cit., p. 101.

21) Smith によれば、空間が無いとは考え得ぬと Kant は言うが、空間が無いと考えることはできるだろう。したがって空間が無いと考えるということは、空間が直観されないと考えということであろう。故にこのことから空間の先天性を導き出してもそれは心理学的の先天性にすぎないだろう (op. cit., p. 103-4)。Paton も ii) の議論が心理学的必然性をもとにしていることを指摘し、かかる議論が誤っているとする (op. cit., p. 124)。Smith, Paton の指摘は正しい。

22) op. cit., p. 118.

23) op. cit., p. 117.

24) Paton: op. cit., p. 119.

25) 空間・時間が純粋直観であるならば、幾何学と時間一般の公理及び一般力学とは可能である。したがって空間・時間の純粋直観なるは幾何学、時間一般の公理、一般力学の可能性の十分条件である。ところで幾何学と時間一般の公理及び一般力学が可能であるならば、空間・時間は純粋直観である。したがって空間・時間の純粋直観なるはそれらの可能性の必要条件である。故に空間・時間の純粋直観なるはそれらの可能性の必要十分条件である。

空間・時間の純粋直観なることが必要十分条件であることを指摘しようとする Kant の意図は次のことばに明らかである。即ち「かかる認識〔先天的総合的認識〕はこの概念〔空間概念〕の与えられた説明の仕方を前提し得のみ可能であること」を示すことが先験的究明に要求されるということばである。

26) Paton: op. cit., p. 127.

27) Friedrich Delekat: Immanuel Kant, 2. Auflage, 1966, S. 54.

28) op. cit., S. 66.

29) Paton: op. cit., p. 150.

30) Paton: op. cit., p. 176.

31) op. cit., S. 68.

32) Ethik, S. 109-11.

- 33) Ethik, S. 103-5.
- 34) B 147, A 157=B 196.
- 35) Hermann Weyl: Philosophie der Mathematik und Naturwissenschaft, 3. Auflage, 1966, S. 170.
- 36) A 220-1 = B 268.
- 37) Gottfried Martin は数学の構成的性格と客観的妥当性との結びつきを示している。「直観における構成は…
…それ自体において可能な定義をその概念が客観的実在性をもつところの定義へと制限する」(Immanuel Kant, 3. Auflage, 1960, S.31)。
- 38) Prolegomena § 10 において時間は算術と純粋力学の両方に関係づけられている。
- 39) W. S. Peters によれば、構成可能性は幾何学においてよりも算術において一層よく証示される。これは時間が現象一般の形式として単に外的現象の形式にすぎない空間よりも上位に置かれたことに対応している
(Widerspruchsfreiheit und Konstruierbarkeit als Kriterien für die mathematische Existenz in Kants Wissenschaftstheorie, Kant-Studien, 1966, S. 183.)。
- 40) スティーブン・F・パーカー著赤堀也訳「数学の哲学」1968, p. 116参照。
- 41) Stephan Körner: Zur Kantischen Begründung der Mathematik und der Naturwissenschaften (Kant-Studien, 1965, S. 463~)。